もし、明日が選べたら

蘭 葡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もし、明日が選べたら

【Ｎコード】
Ｎ８４０８Ｄ

【作者名】
蘭　葡

【あらすじ】
もし、明日が選べたら…あなたはどうしますか？

1――【宣告】

前まで、暗闇の中を僕はさ迷っていた。

右も左も分からなくて、どっちに進んでいるのかさえ理解できない。
ゴールなんて有るのか。
あったとして、そこに有るものは何なのか。
不思議でならなかった。

しかし、僕はゴールへと辿り着いた。
否…辿り着いてしまった…――

＋　＋　＋　＋　＋　＋

あれは、昨日の事だった。

授業中に、僕の視界が暗くなった。
気づいた時には、僕はベッドで横になって白い天井を眺めていた。
最初は何故ここに横になっているのか理解出来なかったが、保健の先生が教えてくれた。

「授業中に倒れたのよ」

ああ…だから急に目の前が真っ暗になって、保健室のベッドで寝ているんだ。
だが、何故倒れたのかが分からない。
先生は『軽い貧血』だなんて言っていたけど、僕は貧血になんかなったことがない。
小学校から高校の今まで、健康そのものだったんだから。
煙草も吸わない、お酒も飲まない。
未成年ってのもあるけど、成人になってもそれらをやろうとは思わない。

「何だか疲れてるみたいだから今日は早く帰ってゆっくり休みなさい」

僕は言われた通りにした。

教室に戻って、担任の若井先生に理由を話した。

「歩いて帰れるか？」

「大丈夫です。母さんは仕事で居ないから」

バックを持って、学校を出た。

こんなに早く帰るのは初めてだ。
道路を走る車の数は、朝と違って少ないし、僕みたいな学生は歩いていない。

きっと、勘違いされるんだろう。
平日の午前から学生が街中を歩いているなんて、サボったんだと思われる。

僕は、そんな人目を気にしてわざと人の少ない道を選んで帰った。
こんな道なら誰よりも知っている自信がある。
何度も通ってきた道だから。
君達にもあるでしょ？

家に着いて、いつもの場所から鍵を取り出す。
鍵の開く音がすると、中から何か走ってくる音がした。

玄関を開けると、置物の洋に座ってずっとこっちを見つめる犬がいる。
僕の家で飼っている、ミニチュアダックスフンドのマロンだ。
サラサラの栗色をした毛に、短い足、垂れた耳。
僕達の家族だ。

「ただいま。マロン」

頭を撫でてやると、嬉しそうな目をして尻尾を振っている。

そうだ、母さんにメールしなきゃ。

『今日、学校で貧血を起こして倒れたから早く帰ってきた。家でゆっくり休みます』

すると、直ぐに母さんからメールがきた。

『大丈夫？今日、直ぐ帰るから明日病院に行きましょう』

病院だなんて…

大袈裟過ぎるよ。

まぁいいや。

一先ず、寝よう……――

『……う……ゆ…』

ん…

「優！」

「あぁ…母さん」

母さんが帰ってきたってことは、もう夕方か。
少し休む予定だったけど、熟睡してたみたいだ。
窓から茜色の光が僕の部屋に入ってきている。

「体、大丈夫なの？」

「少し寝たから大丈夫だよ」

「明日学校休んで病院に行く？」

「平気平気。テスト近いし、休むわけにはいかないよ」

「無理は駄目だからね」

「うん。ありがとう」

僕の学校は、夏休み前にテストがある。
それで赤点を取れば、夏休みも学校に通わなければならない。
僕はそんなの嫌だ。
そのためにも勉強しなきゃ。

「ゴホッゴホッ…」

風邪、かな？
いいや。
勉強頑張らなきゃ。

時計を見ると、夜の１２時を回っている。
気づかないで今まで勉強してたんだ。

「あれ？」

全然進んでない…
確かに僕は今まで勉強してたはずだ。
なのに、ノートには始めた時の問題と答えしか書いてない。
僕は何をしてたんだろう。

「何か体がだるい…」

風邪だなぁ…
明日病院で診てもらおう。

ん…朝、か…

何だか昨日よりだるい…

「優ー。病院行くよー」

「はーい…」

ふぅ…体を動かすのもやっとの状態だ。
完璧に風邪ひいた。

風邪かと思っていたけど、診察した医師から告げられたのは重く酷い言葉だった。
『癌』
余命三ヶ月…
未来をかき消すには十分な宣告だった…

残り…三ヶ月――

1――【宣告】（後書き）

支離滅裂かもしれません。
誤字・脱字があるかもしれません。
その場合はご指導ください。

2――【放心】

僕は、余命三ヶ月という宣告を受けてから、何にもやる気が起きなくなった。
テスト勉強、テレビ、コミュニケーション、学校。
『どうせ、あと三ヶ月だから』なんて思うと、余計に僕はやる気を無くした。

母さんは母さんで、そんな宣告を受けた僕を励まそうと、いろいろやってくれる。
でも、僕はそれすら目障りになっていた。

「優、おはよう。学校に行きましょう？」

「行かない」

「そんなこと言わないで。テストもあるんでしょ？」

「行かない」

「そう…学校に連絡はしておくけど、行きたくなったらお母さんに言って？今日休みだから…」

「……」

行く筈がない。

行ける訳がない。
学校に行って『僕はもうすぐ死ぬ』なんて言いふらすのか？
そんなのはごめんだ。

だから、勉強なんてしない。
もうすぐ死ぬんだ。
将来がないから、勉強なんて意味がない。

時間も昼にさしかかった時、僕の携帯が鳴った。
けれど、見るのが面倒臭い。
放っておこう。
どうせ、友達からだ。
友達なんて作っても意味がない。
僕は居なくなるんだから。

「優ー。お昼ご飯よ」

「わかった」

食べなくてもいいけど、死ぬのが早まるのだけは嫌だ。

母さんとは何も話さずご飯を食べている。
母さんも、かける言葉が無いのだろう。
僕も無いから。

何気なく付いていたテレビに目をやると、ニュースが流れている。

自殺とか殺人とかのニュースばかりだ。

自殺、か…
どうして自殺なんてするんだろう。
つまんなくなったから？
寂しいから？
僕は自殺しようとは思わない。
自分はいいかもしれないけど、後に残った家族とかは悲しむだろうなぁ。
……僕が死んだら、母さんはどうするんだろう。
泣いてくれるのかな？

「ねぇ、母さ…」

「駄目よ」

「え？」

「優が死ぬのは許しません」

許さないって、僕は何もしないでも死んじゃうのに。
母さんって変な人。
でも、母さんの厳しい顔を見たのは初めてだ。
優しくて、強くて、暖かくて…

「優…」

あれ？
視界がぼやけてる。
あぁ…泣いてるんだ…

「ごめん…母さん…」

「いいのよ…」

母さんも泣いて、る？
母さんを初めて泣かせた？
僕がこんなんだからだ。
そうだ、もう母さんを悲しませちゃいけないんだ。
母さんの涙を見るのは、これが最初で最後にするんだ。

部屋に戻って携帯を見てみると、友達からメールが数件来ていた。
内容はみんな『学校休んだみたいだけど、大丈夫か？』などの僕を心配するメールばかり。
みんなが心配してくれてる。
心配をかけないようにしなきゃ。
僕にとっては一番大切な友達だから…

前向きに生きていこう。
たとえ、死ぬ時期がわかっていても、挫けちゃいけないんだ…――

余命…二ヶ月と三十日――

2――【放心】（後書き）

更新はまちまちですが、出来るだけ頻繁に更新しようと思います

3――【友人】

今日は何だかいつもと違う朝だ。
上手く言えないけど、ちゃんと目が覚めたし。
朝が苦じゃない。

「行ってきまーす」

母さんはもう仕事でいない。
けど、昔からのこの習慣は抜けない。
鍵をいつもの場所に隠して、学校へ向かった。

学校でなんて言おう。
『風邪だった』って嘘を言うか、正直に言ってしまおうか…
でも、正直に言ったらみんなに心配かけるだろう。
悩むなぁ…

いろいろ考えてたら、もう学校に着いてしまった。
まぁ、聞かれたらその時思い付いたことを言えばいいか。

「よっ！昨日どうしたんだ？」

いきなり聞かれてしまった…

「う、うん。病院に行ったんだ」

「病院？どっか悪いのか？」

「ただの風邪だったよ。昨日休んだらだいぶ落ち着いた」

「そっか。でもあんまり無理すんなよー」

深く聞いてこない友達に感謝するべきか…
でも、助かった。
先生には、母さんが言ってるから大丈夫か。
また、倒れないように気を付けなきゃ。

深く聞いてこない友達に感謝するべきか…
でも、助かった。
先生には、母さんが言ってるから大丈夫か。
また、倒れないように気を付けなきゃ。

それから学校ではテスト自習が始まり、何事もなく1日が過ぎた。
学校が終わり、帰ろうと鞄を持つと、友達に呼ばれた気がした。

「一緒に帰ろうぜ」

「うん」

いつもは逆の方へ帰っていく友達が、今日は何故か誘ってきた。
僕は不思議に思ったが、断る理由がなかった為、首を縦に振った。

学校から程近い公園に寄ると、ベンチがあった。
白い何の変哲もないただのベンチ。
公園なのに、周りにはブランコも無ければ、滑り台も無い。
ベンチが二つあるだけの殺風景な公園。

僕と友達はそのベンチに座った。

「なぁ」

「ん？」

「お前とこうやってベンチに座ったの、久しぶりだな」

「うん」

本当に久しぶりだ。
一年生の時以来だと思う。
あの時も、ただ何となく公園に来てベンチに座った――

×　×　×　×　×

「ふぅ…暑いな」

「うん」

「お前は学校、楽しいか？」

「まだ分からないよ」

「そうだったな」

そう。
今の学校が楽しいかどうかなんて、まだ分からない。
これから時間を掛けて、楽しいか楽しくないかが決まっていく。
僕は、楽しい方がいい。
そうなるように頑張ればいいのかな…

「少し涼しくなってきたな」

「うん」

空には夕焼けを背景にして、カラスが群れをなして飛んでいく。
彼らはどこから来て、何処へ行くんだろう。

「帰るか」

「うん」

× × × × × ×

あの時は、本当にどうでもいい話ばかりだった。
友達が話し掛けてきて、僕が応える。
今回もそうだろう。

「最初、元気無いぞ」

「誰が？」

「お前だよ。お、ま、え」

「そんなことないよ」

いつも通りに過ごした筈なのに…
顔に出てたのかな。
そうだったら、バレたかもしれない。
風邪なんて嘘だってこと…

「なぁ…」

僕は友達が発する言葉の一つ一つに心臓が大きく揺れる。
何でこんなに焦ってるんだろう。
バレるのが怖いからだろうか…

「何か悩みがあったら俺に相談しろよ」

「うん」

良かった…バレてない。
このまま隠し通せばいいんだ。
……本当に隠し通せばいいのかな。

「じゃあ、俺帰るわ」

「うん。じゃあね」

「また明日学校でな」

「うん…」

三ヶ月後にはこんな約束も出来ない。
僕は、友達が帰ってからもそこのベンチで悩んでいた。

残り――二ヶ月と二八日

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8408d/

もし、明日が選べたら

2010年10月22日00時48分発行